

リンゴに対する

CDU 化成の肥効

青森県りんご試験場
化学部栄養肥料科

一 木 茂

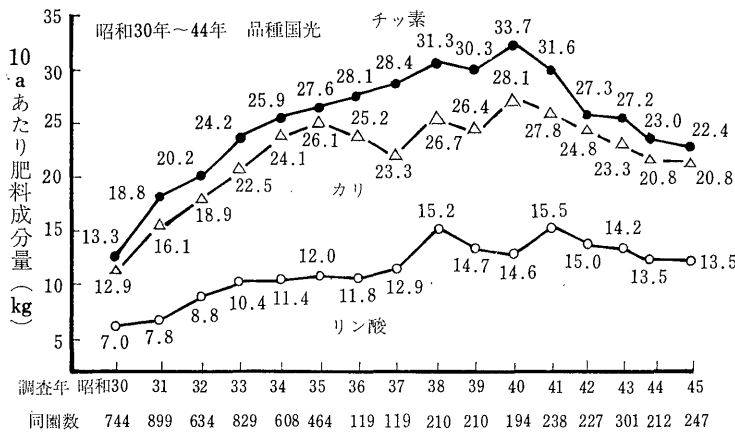
はじめに

売れるリンゴをつくる根本対策は品種更新で、これに栽培技術、流通体制の改善が結びつかない限りならない。改善を要する栽培技術の中で、施肥の適正化はきわめて重要なものの一つである。

別図は青森県における国光の施肥実態である。これによると、昭和40年をピークに少しずつ減少しているが、依然として多肥の傾向にある。

多肥になった理由の一つには、リンゴ農家の経営面積が小さく、単位面積あたりの収量増大を、施肥に頼りすぎた結果によるものと考えられる。

県内リンゴ施肥量の動向 (青森県りんご試験場)



しかし多肥の結果は、果実の着色、食味、貯蔵力を低下させ、リンゴ園土壌のpHを低下させ、各種の生理障害多発の原因となっている。デリシャス系品種は多肥を続けても、着色(地色は悪くな

第1表 デリ系品種の施肥実態 (昭和45年)

10 a あたり施肥量(kg)		
チ ッ 素	リン 酸	カ リ
26.1	15.5	23.4

調査園数 2 3 8 園

るが)に対する影響が少なく、国光よりも多肥になる傾向がある(第1表)。

リンゴの施肥適正化については、果実品質の向上、土壌の悪化防止に主眼をおき、各地で種々の試験が行われている。その結果、これまでの経験的多肥を改め得る成績が多く出ている。

青森県においても、10 aあたりの標準施肥量をチッソ15kg, リン酸5~7kg, カリ10~15kgの基準で普及奨励している。

1. 使用肥料の実態

デリシャス系品種の施肥実態から、使用肥料の種類をみたものが第2表である。

最近単肥 第2表 使用肥料の実態 (昭和45年デリ系) が使用される例は少なく、リンゴ用の複合肥料が使用される場合が多い。また、

種 類	園 数	割 合
単 肥	18	7.6
複 合 肥 料	120 (85)	50.4
複合+単肥	100 (58)	42.0
計	238(143)	100.0

()内は有機入り複合肥料使用園、無機複合肥料とあわせて使用している園も含む

種類、量を問わず、なんらかの有機入り複合肥料が使用されていることも最近の特徴である。

2. リンゴと有機質肥料

天然の有機質肥料(魚粕、油粕、骨粉等)を使用すると果実の着色、食味、貯蔵力が増すという考えは栽培農家の中に深く滲透しており、上述のような結果になったと思われる。

10年間にわたり、りんご試験場のほ場で、有機質肥料と無機質肥料の比較試験を行った結果、第3表のような成績が得られている。

樹幹の肥大、収量とも無機質区がまさり、色沢歩合、食味等においてやや有機質区がよいと思われる傾向が認められたが、これが肥料の種類のあるかについてはハッキリ言えないようである。

結局、栽培農家が信じている有機質肥料のメリットについては、経済的にも肥効の点からも問題があるように考えられる。

3. リンゴに対する CDU 化成の肥効試験

有機質肥料と同様の肥効を示すといわれている

